三鷹中央学園における

学校を核とした第四中学校区の地域活性化プロジェクト

「みたかちゅうおうプロジェクト」

事業報告

みたかスクール・コミュニティ・サポートネット

平成 23 年度文部科学省委託事業

「社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究」

もくじ

ページ

はじめに　２

事業概要　４

みたかちゅうおうプロジェクトについて

事業報告　１１

Ⅰ．事業計画の練り直しについて　１１

・防災

・キャリア

・学び

Ⅱ．事業の実践　１４

・防災教育

・キャリア教育

・学習支援

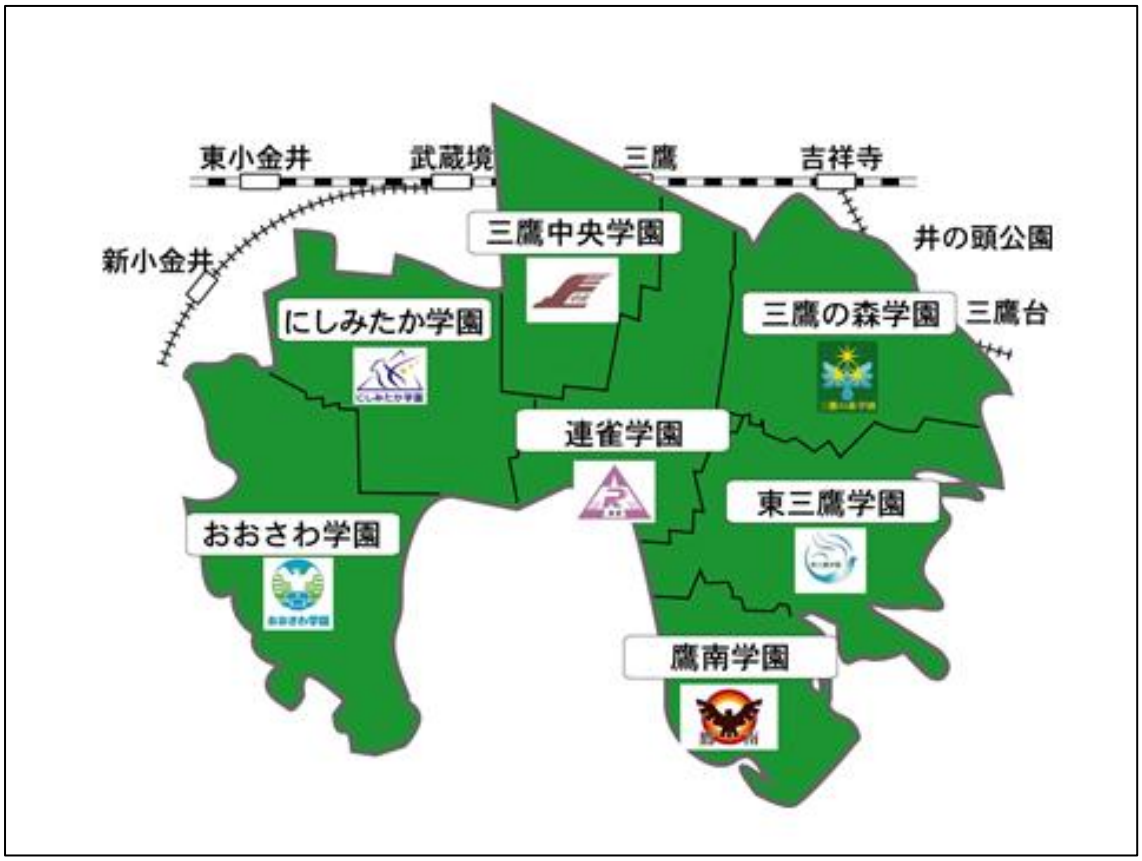
成果と課題　２１

今後の展望　２７

協力者一覧　２９

はじめに

三鷹市は、コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育に基づき、７つの中学校区ごとの「学園」にそれぞれコミュニティ・スクール委員会が置かれ、地域住民が学校運営に参画し組織的に学校を支援する体制がとられています。私たち「みたかスクール・コミュニティ・サポートネット」が支援している「三鷹中央学園」も、第三小学校、第七小学校、第四中学校の２小学校１中学校が平成 21 年４月に学園として開園しました。保護者、地域の声を反映しよりよい学園、学校となるためにコミュニティ・スクール委員会が協議機関としてさまざまな取り組みを推進してきましたが、取り組みの実動部隊となる事務局機能の必要性が生じ、平成 23 年４月に、本団体を設立しました。



三鷹市の７つの小・中一貫教育校

みたかスクール・コミュニティ・サポートネット（以下、サポートネットと呼ぶ）は、三校の PTA 役員経験者、放課後子ども教室（三鷹市では「地域子どもクラブ」）運営経験者など、日頃から子どもたちのために学校に関わっているメンバーで構成されています。

今回、設立したばかりの本団体が文部科学省の委託事業に事業申請するにあたっては、素人のお母さん集団に一体何ができるのか、自分たちでも議論になりました。
「子どもたちのために」という思いはあっても、所詮はＰＴＡ活動の延長のようなことしかできないのではないか、という意見が大半でした。しかし、私も含めたメンバーのほとんどは日頃から子どもたちのために、また学校のために自分の時間を犠牲にしてかなりの時間を費やして無償のボランティアで学校支援をしていました。ＰＴＡ役員、地域子どもクラブ実施委員、地域の青少年健全育成団体、学習ボランティア、朝の読み聞かせからゲストティーチャーのコーディネート、保護者や地域とつながりを持ち学校と連携するための調整や連絡まで、一人の人が何役もこなしています。他の学園でも同じような状況で、どの会議に出席してもメンバーは似たような顔ぶれ、ということも少なくありません。
働く保護者が増え、ＰＴＡ活動や学校支援活動に関わろうとする保護者が減り、いつも惜しみなくボランティアをしてくれる決まった顔ぶれに負担がかかっている現状に、子どもたちに関わる活動をすることの喜びを感じながらも、私たちの心の中に、疑問を感じるとともに長い事「不公平感」という不満の火種をくすぶらせていたのも事実です。
「子どもたちのために私たちにできることは何か」という思いと、今回の委託事業が学校支援ボランティアのあり方、地域と学校をつなぐコーディネート機能のあり方について、事業化のきっかけを与えることになれば幸いです。

今回の事業を実践するにあたり、三鷹市教育長貝ノ瀬滋先生、三鷹市教育委員会指導課松永透教育施策担当課長にはご指導ご助言をいただきました。また、三鷹中央学園三鷹市立第三小学校白井千晴校長、同第七小学校田邉佳伸校長、同第四中学校勝野能光校長をはじめとする三鷹中央学園の先生方には多大なるご理解とご協力をいただきました。ここに紙面上ではありますが感謝の意を表したいと思います。どうもありがとうございました。

みたかスクール・コミュニティ・サポートネット
代表　四柳　千夏子

事業概要

「みたかちゅうおうプロジェクト」について

■実施概要

コミュニティ・スクールを基盤とした小・中一貫教育を進める中で、地域のさまざまな人材や地域団体をつなぎ、中学生を中心とした子どもたちの育成、生きる力を持った子どもたちの育成を目的に、学校を核とした地域づくり＝スクール・コミュニティを推進するための拠点の構築をめざすものです。

■実施体制と構想について

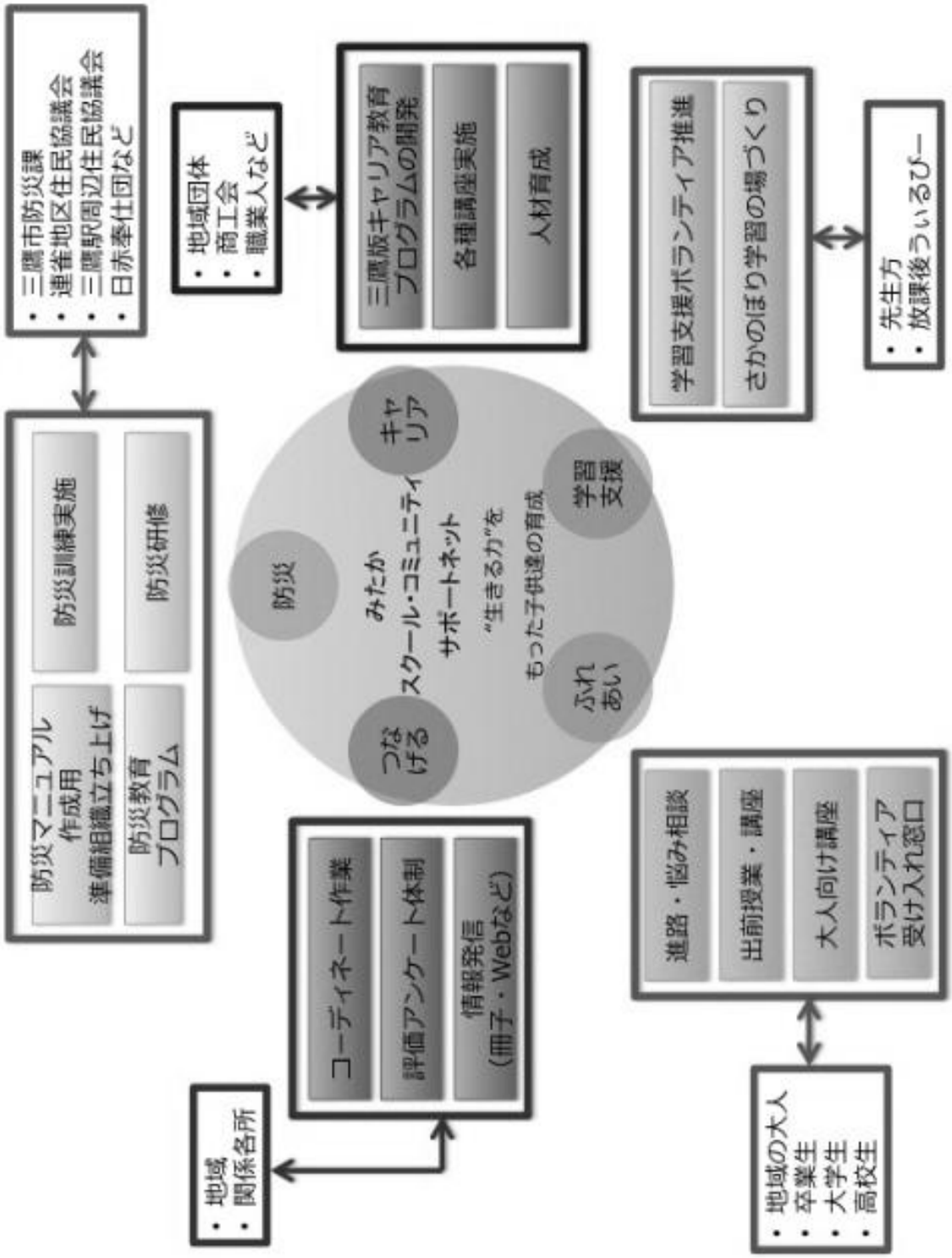
三鷹市では、全校が中学校区を単位とする小・中一貫教育に取り組んでおり、「義務教育９年間」というとらえ方で子どもたちの成長に責任をもつ、という教育行政の体制は整いました。その教育的成果は、中学 1 年生での不登校の減少等に現れ始めています。私の住む地域も、平成２１年４月、三鷹市立第三小学校・第七小学校・第四中学校が「三鷹中央学園」として開園しました。

その学園の運営を円滑に推進するために必要な事項を協議する機関として学園を支援しているのが三鷹中央学園コミュニティ・スクール委員会（学校運営協議会）で、ＰＴＡ、青少年対策地区委員会、交通安全対策地区委員会、町会、住民協議会、商工会、主任児童委員、民生児童委員、保護司、三鷹市地域子どもクラブ実施委員会など学区内のさまざまな地域団体や地域密着で活動している人々がメンバーを構成しています。

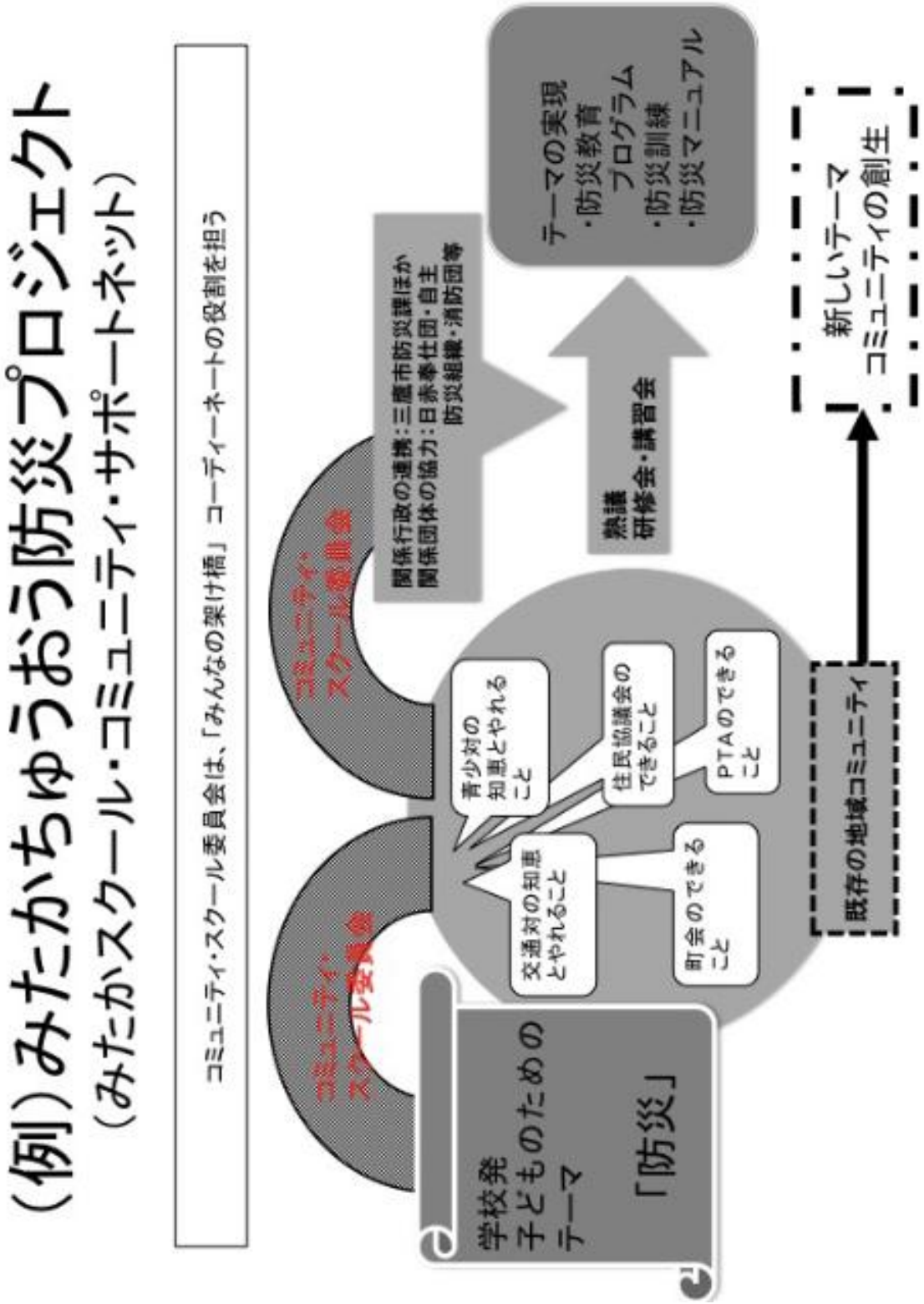
申請団体である「みたかスクール・コミュニティ・サポートネット」は、三鷹中央学園コミュニティ・スクール委員会を支援する事務局機能・実動部隊であり、任意団体として平成 23 年５月、13 名のスタッフで活動をスタートさせ、将来的には法人化も視野に入れています。サポートネットのスタッフは、全員が三鷹中央学園のＰＴＡ役員経験者であり、なおかつ小学校での放課後の子どもの居場所づくり事業である「三鷹市地域子どもクラブ」（放課後子ども教室）の運営スタッフを長年経験していますが、教育のプロではありません。普段はごく普通の母親であり専業主婦集団です。しかし、「子どもたちのために自分たちにできることをやる」という熱意をもったメンバーであり、今回の事業はある意味で「フツーのお母さんの挑戦」になります。

構想については次ページ　事業全体イメージ図、事業内容例「みたかちゅうおう防災プロジェクト」イメージ図参照。

【事業全体イメージ図】


・三鷹市防災課
・連雀地区住民協議会
・三鷹駅周辺住民協議会
・日赤奉仕団など
防災マニュアル作成用準備組織立ち上げ
防災訓練実施
防災教育プログラム
防災研修
・地域団体
・商工会
・職業人など
三鷹版キャリア教育プログラムの開発
各種講座実施
人材育成
防災
キャリア
みたか
スクール・コミュニティ
サポートネット
“生きる力”を
もった子供達の育成
つなげる
ふれあい
学習支援
学習支援ボランティア推進
さかのぼり学習の場づくり
・先生方
・放課後ういるびー
・地域
・関係各所
コーディネート作業
評価アンケート体制
情報発信（冊子・Webなど）
進路・悩み相談
出前授業・講座
大人向け講座
ボランティア受け入れ窓口
・地域の大人
・卒業生
・大学生
・高校生

【事業内容例　イメージ図】


（例）みたかちゅうおう防災プロジェクト
（みたかスクール・コミュニティ・サポートネット）
コミュニティ・スクール委員会は、「みんなの架け橋」コーディーネートの役割を担う
コミュニティ・スクール委員会
コミュニティ・スクール委員会
関係行政の連携：三鷹市防災課ほか
関係団体の協力：日赤奉仕団・自主防災組織・消防団等
熱議
研修会・講習会
テーマの実現
・防災教育プログラム
・防災訓練
・防災マニュアル
青少対の知恵とやれること
住民協議会のできること
PTAのできること
交通対の知恵とやれること
町会のできること
既存の地域コミュニティ
新しいテーマ
コミュニティの創生
学校発
子どものための
テーマ
「防災」

■学校内の抱える課題

子どもたちの学習意欲の低下と学力格差が叫ばれている昨今、定着不足の学習内容を見過ごされてしまった子どもへのさかのぼり学習や補習は、限られた授業時数の中では難しい。できないまま進級していくことでますます学習意欲は低下していく一方です。学力の定着をどう図っていくか、学習意欲をどう向上させるかは、学校の大きな課題であり、学校だけでは解決し得ない課題でもあります。

また、コミュニティ・スクール委員会ができたことで、地域のさまざまな力がさまざまな形で学校を支援してはいますが、学校の力だけでは、地域の力を十分に掘り起こしているとは言えません。

地域の側には、シニア世代のボランティアグループや市民団体など、子どもの教育や子育てにもっと関わりたいと思っている多くの人材があるにもかかわらず、学校だけの情報収集力では把握しきれておらず、せっかくの人材が学校への門戸をくぐれずにいるのが現状です。

■地域の抱える課題

コミュニティ・スクール委員会の構成が、たくさんの地域団体から成るように、学校や子どもを取り巻く「地域」には、多くの団体が子どもたちの健全育成を目的にさまざまな活動をしています。三鷹市の青少年対策地区委員会も 40 年来の長い歴史があるし、ＰＴＡは学校の開校以来、子どもたちの幸せを願って活動しています。しかし、それぞれの団体が個々に活動していることが多く、せっかくの活動が重複していたり、似たような取り組みになっていたりして、子どもたちにはあまり印象に残らず「地域に支えられている」という実感が少なくなってしまっています。また、長い歴史が邪魔をして本来の活動理念や団体の目的などを見失い、ただ行事をこなすだけになる場合もあります。「何かを変えたい」と思いながらも団体メンバーの高齢化や固定化もあって、現状維持にとどまっているか形骸化の傾向があります。

また、社会教育会館やコミュニティ・センターで自主活動している人々も、せっかく自己実現のための生涯学習に取り組みながらも、そこで得た知識や技能を「学びの循環」として社会還元する機会が少なく、社会資源として貴重な人材（財）であるにもかかわらずその力を活かしきれていません。

さらにこのたびの東日本大震災をきっかけに、市民の「防災」への意識の高まりとは裏腹に、子どもたちへの防災教育は学校任せとなっており、地域ぐるみの防災への取組みは、町会・自治会、住民協議会はもちろんのこと、大人も子どもも一緒になって考えていかなければならない喫緊の課題です。

それには、災害時、地域の一時避難所にもなっている小中学校を核として地域諸団体と共に取り組むネットワークを構築する必要があります。

こういった「子ども」をキーワードにした大人同士の横のつながりを作り、地域が学校を支援していくネットワークを構築するための事務局機能としてサポートネットを

立ち上げていますが、スタッフのほぼ全員が無償ボランティアで活動しているのが現状です。

中学校区にコミュニティ・スクール委員会ができたことで、これまでにはなかった、月に１回程度地域の関係諸団体の実務担当者が顔を合わせ、情報を交換する機会ができたことは画期的なことです。しかし、全ての地域リソースである団体が集まっているわけでもなく、様々な地域のことを決める権限があるわけでもないこともあり、情報交換に留まっています。実際に連携し、協働していくためには、行政依存ではなく、地域の中でリソースをつなぎ、地域の諸団体をより効果的にコーディネートをしていく機能が発揮できる持続可能なシステムを構築することが必要です。

■実施内容　～「みたかちゅうおうプロジェクト」の具体的方策～

	みたかちゅうおう	んなで
		のしく
		たりあって
も		ちよる
		きで
		おきな
ゆめかな		プロジェクト、「みたかちゅうおうプロジェクト」

●子どもたちのより豊かな成長のために必要と思われるテーマを、学園から提案し、その支援をしているコミュニティ・スクール委員会のネットワーク力をもって地域に広め、サポートネットが地域団体や関係行政をつなぎ、知恵や力を持ち寄って出しあう場をコーディネートし、それぞれの良さを活かしながら、大きな力として結集しテーマを実現するための取り組みが今回の事業内容です。

【事業の流れ】

①三鷹中央学園が核となり、学校運営協議会（三鷹中央学園コミュニティ・スクール委員会）と協議し、「子どもたちのため」のテーマを提案する。

（　２３年度テーマ：「防災」「キャリア」「学び」　）

↓

②コミュニティ・スクール委員会がそのネットワークを活かし、既存の地域団体に声をかけ、学校発のテーマについて広めていく。

↓

③地域団体は、提案されたテーマについて自分達にできること、やれること、またやりたいことを持ち寄って語り合う。

↓

④関係行政との連携、関係団体などの協力による研修会や講習会の実施、熟議などを繰り返しながらテーマの実現に向けて各団体がもつリソースを活用してできることを提案し練り上げていく。

↓

⑤練り上げたプログラムを実行、検証し継続した活動につなげる。

【テーマの設定について】

１.「防災」について

３月 11 日におこった東日本大震災をきっかけに、市民の防災意識は高まっており、地域ぐるみの防災への取組みは、三鷹市総務部防災課、町会・自治会、住民協議会（コミュニティセンター）、自主防災組織はもちろんのこと、大人も子どもも一緒になって考えていかなければならない喫緊の課題です。実際の非常時には、地域の担い手として中学生にも期待するところであり、日赤奉仕団や三鷹消防署、消防団ほかの協力をいただいた研修会や協議会などを実施しながら、防災教育プログラムの開発、防災訓練の企画・実施、実生活に即した地域の防災マニュアルの作成をめざします。

２.「キャリア」について

第四中学校の２年生では、半年間をかけてキャリア教育が実践されていますが、職場体験の協力事業所、商店会、商工会、職業人の話を聞く会へのゲストティーチャーなど地元の大人たちと連携し、「地域が望む次世代の人材」など未来への期待について語り合う場をもち、学校と連携して「三鷹版キャリア教育プログラム」とも言える地域連携型キャリア教育プログラムを開発。大企業を呼ぶ予算は無くても、地元に密着してのキャリア教育によって、地域を担う次世代育成につなげます。

３.「学び」について

現在コミュニティ・スクール委員会が支援している「学園学習ボランティア」や「パワーアップ学習会」、子ども政策部が主管する三鷹市地域子どもクラブ（放課後子ども教室）四中うぃるびーでの「試験前うぃるびー」など、子どもたちの学びへの支援をさらに推進させ、現在保護者や地域の大人のみの学習ボランティアを、卒業した高校生や大学生にも広め、地域の小・中学生との関わりを持ってもらったり、三鷹図書館、社会教育会館、三鷹ネットワーク大学等、学習文化施設などと連携し、子どもや大人に向けた講座などを企画・開講することで、子どもたちの学ぶ意欲の向上および興味関心の世界の広がりをめざします。

【コーディネーター機能の確立】

上記の事業の流れ①～⑤を実現し、この事業を成功させるためには、一つの目的やテーマに向かって、実務レベルで地域の諸団体をつなぎ合わせ、実現していくためのコーディネートが必要不可欠です。実際、そういったコーディネート機能が無いために多くの団体が横をつながれずに個々に活動している現状があります。三鷹中央学園には地域コーディネーターが２名いますが、事業を継続させるためには、個人として活動するのではなく、組織だった活動を保証するための法人化を視野に入れた、チームとしてのコーディネート機能の確立が必要です。サポートネットの中でプロジェクトチームを編成し、コーディネーター研修を受けながら取り組んでいきます。

【ＷＥＢや紙媒体での広報活動について】

コーディネート機能を確立するのと同時に、地元地域へ広く広報することは、今後の活動を継続させるために大切なことです。ＷＥＢはもちろん、インターネットを利用しない世代のための紙媒体での広報も制作チームを作って取り組んでいきます。

以上、「子どもをキーワードに集う地域をつなぎ、学校を支援する活動」の取り組みによって地域の団結を強め、それぞれの団体や関係者が自己有用感や達成感をもって取り組むことで地域活性化を図り、子どもたちにとっても「大人たちががんばっている姿」から学ぶことの多い地域となり、さらにはそこで育った子どもたちが、いったんは高校、大学、社会人とこの地域を出ていっても、いつか地域の担い手として戻ってきてくれるような継続した流れを生み出せる効果のある実践をめざします。また、この活動をとおして地域の教育力を高め、学校支援者や地域協力者の組織化を図り、継続的に学校を支援できるように法人化をめざした組織づくりを推進します。

★★メンバーの意識の変化～～スタート当初（10 月～11 月）～～

ここで着目したいのは、集まってくれたメンバーの気持ちの変化です。スタート時の声かけで集まったのは 16 名（途中仕事の都合で１名脱退）、全員が PTA や地域子どもクラブでの役員や運営経験者で、共に活動している仲間でした。日頃から子どもに関わる活動をしており、今回も「子どもたちのために何かするなら手伝うよ」ぐらいの軽い気持ちで参加してくれた彼女たちは、事業の概要を聞かされて「そんなことできるわけない」と気持ちの上でかなり引いてしまいました。仕事として関わって、関わった分だけ「収入」が得られるんだ、という説明にも賛同の声は少なく、戸惑いのほうが強かったようです。　メンバーには三小側の人と七小側の人がいるため、バランスも考慮し、三小地域コーディネーターと七小地域コーディネーターを「共同代表」という名目にするなど人間関係にも配慮しました。元銀行員や自営業の経理を担当している人などに事務局会計を、PTA で書記や広報委員長を歴任した人などには庶務、WEB、チラシ等の作成を担当してもらったりと、自分の得意分野を生かした担当決めをしましたが、不安だらけでスタートしました。

事業報告

Ⅰ．事業計画を現実にするための練り直し

平成 23 年 10 月、事業計画申請が採択されたのを受け、申請した事業計画書を実現させるために、また実施期間が 5 か月と短くなってしまったことで、できることとできないことを精査するために、事業内容をあらためて練り直しました。またその際には外からの視点も必要と考え、子育て NPO の方や市民としてボランティア活動をしている方、学校教育に造詣の深い方など数名の外部の方を交えての話し合いも行いました。

１．「防災」について

［申請内容］

日赤奉仕団や三鷹消防署、消防団ほかの協力をいただいた研修会や協議会などを実施しながら、防災教育プログラムの開発、防災訓練の企画・実施、実生活に即した地域の防災マニュアルの作成をめざします。

三鷹市防災課に相談。まずは自分たちにできることを始めるために、防災の視点をもって学区内を実際に歩いてみました。知らないことがまだまだあることに気づくと同時に、防災マップや防災訓練などは、すでに三鷹市や既存団体が行っていることを知りました。私たちだからこそできる、子どもの視点、母親の視点でみた情報の発信が必要だと感じました。

［練り直し内容］

●「3.11 地域防災を考える日 in みたかちゅうおう」（仮称）の実施

平成 23 年 3 月 11 日に起こった東日本大震災の 1 年後の日に、四中学区の一時避難所でもある第四中学校を会場に、防災に関するイベントを行うことで、被災地の一日も早い復興を祈り、絆の大切さを再確認すると同時に、もしものときに自分たちができることは何なのかを考えるきっかけづくりを行う。

●「もしものときのハンドブック in みたかちゅうおう」（仮称）の作成

子どもが学校にいる時間帯に震度 6 強の地震が発生、保護者は子どもを引き取りに学校に向かわなければならない、という想定のもと、学区内のポイントや学校までのルートを実際に歩いてチェックし、調査情報をハンドブックにまとめ、学園の児童・生徒、保護者、地域に配布。学校ごとの避難所運営マニュアルとリンクさせて、非常時の対応に備える。

２．「キャリア」について

［申請内容］

職場体験の協力事業所、商店会、商工会、職業人の話を聞く会へのゲストティーチャーなど地元の大人たちと連携し、「地域が望む次世代の人材」など未来への期待について語り合う場をもち、学校と連携して「三鷹版キャリア教育プログラム」とも言える地域連携型キャリア教育プログラムを開発。

商店会、商工会等とは現在のところ関係性が希薄であり、またそういった方々はご本人が事業主ということもあり、理解や協力を求めるには時間をかけて信頼関係を築かなければなりません。駅前商店会や商工会は地元（学区内）ということもあり、身近な存在である一方、失敗すると地元の人間関係が悪化するおそれもあり、慎重な検討が必要なため、今回は見送ることにしました。

［練り直し内容］

●「授業づくりのお手伝い　セカンドティーチャー‘ｓガイド」（仮称）の作成

出前授業や授業支援等、学校教育を支援してくださる団体、企業、個人のリソース集を紙媒体、ＷＥＢ媒体で作成。実際に先生方に手に取ってもらい授業で活用してもらう。

３．「学び」について

［申請内容］

現在保護者や地域の大人のみの学習ボランティアを、卒業した高校生や大学生にも広め、地域の小・中学生との関わりを持ってもらったり、三鷹図書館、社会教育会館、三鷹ネットワーク大学等、学習文化施設などと連携し、子どもや大人に向けた講座などを企画・開講する。

小学校の先生に相談。市内外郭団体と連携するには時間的な制約があります。それよりは三鷹中央学園の子どもたちにしっかりと向き合い、学習の定着を図るような取り組みを。したいと思いました。

［練り直し内容］

●「数学なんてこわくない！小学校算数の総ざらいパワーアップ」（仮称）の実施

三小・七小の６年生を対象に、小学校算数のさかのぼり補習学習を行う。児童の参加は任意とし、教材プリントの提供などは先生方にご協力いただく。補習学習は、学生ボランティア、学園学習ボランティア、地域のシニアボランティアなどが児童の見守りをする。子どもたちの学習は個人ファイルにまとめ、学校や家庭にフィードバックし、学力の定着に努め、子どもたちが不安なく中学校に進学できるよう応援する。

以上の３テーマ、４事業に絞り込み、仕事を分担、担当者を決めました。

★★メンバーの意識の変化～～手探り期（11 月～12 月）～～

担当は決めたものの、「何をどうやるのか」については相変わらず積極的なアイディアは出てきません。みんな、PTA などで決められたお仕事をきちんと処理することは経験がありますが、ゼロからのスタートを自分たちで作り上げていく、ということに関しては経験も無くどうしていいのかわからない、というのが正直なところだったようです。

しかし、「もしものときのハンドブック」を作成するにあたり、まち歩きをしてみようととにもかくにも第一歩をスタートさせると、少しずつ事業の概要が見えてきたのか、少しずつ意欲的に動くようになりました。ただ、まだまだ「仕事」としての関わり、という意識は生まれていないようでした。

Ⅱ．事業の実践

１．「防災」について

■学区内のまち歩きワークショップ（１１／１から１／３１まで随時）
■避難所運営マニュアルについて講師を招いての勉強会（１１／２５）
■市内での小学校防災キャンプ、キャンドルナイト等見学（１２／１０、１２／２２）
■神戸「人と防災未来センター」視察（１／１２）
■有明「そなエリア東京」視察（１／３１）

三鷹市が発行している「三鷹市防災マップ」から、自分たちの学区内の避難場所、給水所などを知るところからスタート。実際に歩いてみて確かめながら、自分たちの疑問を一つ一つ解決していきました。また、上記のような視察や見学を繰り返すことで研鑽を積み、知識を習得してきました。

さらに、他校の避難所運営連絡会のメンバーで、消防団員でもあり、学校防災について詳しい地域有識者（篠原秀和氏）に講師を依頼し、研修会を行いました。

これら、自分たちの学んだこと、学びから気づいたことなどを伝えるために・・・・

- 「3.11 地域防災を考える日 in みたかちゅうおう」の実施
- 「もしものときのハンドブック in みたかちゅうおう」の作成

※別添　冊子「防災・減災で地域をつなぐ～2011 みたかちゅうおうプロジェクト―防災教育―実践報告」

２．「キャリア」について

■平成２３年度東京都教育支援フォーラム（１１／２６）
■平成 23 年度中学生の職場体験推進協議会発表会（１／２１）
■学校教育コーディネート実践：三小５年「日本の文化体験」（２／１７）
■学校教育コーディネート実践：ツボミスクール（ワコール㈱）保護者向け（２／２０）
■学校教育コーディネート実践：七小１年「昔のあそびをしよう」（１／２６～３／６）
■学校教育コーディネート実践：四中３年「MIKAKO 卒業記念特別授業」（３／１３）

●「授業づくりのお手伝いセカンドティーチャー‘ｓガイド」の作成

放課後の子どもの居場所である地域子どもクラブには三小、七小にそれぞれ地域コーディネーターがおり、２人が連携して活動したりはしていたものの、学校教育への組織だった支援というのは実績も経験もないなかで、まずはリソースを集めるためにフォーラムに参加することからスタート、そこでリソースデータのまとめ方を学びました。

リソースデータをまとめるにあたっては、知人で大手 IT 関連企業に勤務した経験のある方にアドバイスをもらい、データ入力はその方に依頼しました。また、ガイドの体裁については、昨年度作成に関わらせていただいだ「まなびアンテナ」（平成２２年度文部科学省社会教育による地域の教育力強化プロジェクトにおける実証的共同研究受託事業）を参考にさせていただきました。

プランとしては、入力したデータをもとに

① ファイルを作成し、三小・七小・四中の職員室で閲覧できるようにする。
② WEB で閲覧できるようにする。
③ 実際に授業に活用してもらい、そのコーディネートを行う。

という計画でした。

ところが、１月に入り急に学園の各校から地域コーディネーター宛に授業のサポート依頼が立て続けに入りました。コーディネートの実践の方が先に来てしまった格好です。先生方と授業内容について打ち合わせ、人脈を駆使して外部人材探し、日程や時間の調整、先生や人材との連絡調整、当日の対応等については、普段の学校での活動が功を奏しスムーズにコーディネートできたと思いますが、組織として、という点ではまだまだ課題があります。

さらには、キャリア担当者が他の事業の担当も兼任しており、ファイリング作業が難航しました。コーディネート経験が無いため、ファイリング方法を慎重に検討した結果、時間が無くなったという要因もあります。WEB 化や職員室での活用には至らず、こちらは課題が残りました。

３.「学び」について

■三鷹中央学園各校校長に事業プレゼンおよび協力要請（１１／１７）
■七小吉村副校長、内藤教務主幹（６年学年主任）と打ち合わせ（１１／２８）
■七小長島教諭の授業を視察研修（１／１６）
■三小パワーアップ開始（１／１６～２／２９全１４回）
■七小パワーアップ開始（１／１７～３／１全１３回）※１回はインフルエンザによる学年閉鎖のため中止

●「数学なんてこわくない！小学校算数の総ざらいパワーアップ」の実施

この事業は、直接子どもたちに関わるものであり、学校・保護者の理解を得る必要があるため、まずは企画をしっかりと立てました。

【趣旨】
小学６年生を対象にした算数の補習教室を開催することで、小学校算数の定着を図り、子どもや親が不安なく中学校へ進学できるよう、地域がサポートする仕組みづくりを検証する。
【対象】
第三小学校、第七小学校の６年生。（参加は任意とする。）
【場所】
第三小学校学習室、第七小学校学習室
【実施期間】
平成２４年１月１６日（月）より３月２日（金）まで
第三小学校：毎週月、水　午後３時半～４時半
第七小学校：毎週火、木　午後３時半～４時半
全１４回
三小：1/16、18、23、25、30、2/1、6、8、13、15、20、22、27、29
七小：1/17、19、24、26、31、2/2、7、9、14、16、21、23、28、3/1
【費用】
教材費無料。保険料は別途徴収（おおむね 200～300 円：参加人数によって変動）。
教材（プリント）、個人ファイル等消耗品、サポートスタッフ謝礼等については、文科省委託金の中から支払われる。
【使用教材】
小学校算数使用教科書に準じたプリントを使用し、授業内容に沿った基礎学習を行う。
個人の課題に応じて学年をさかのぼる（今年度の各学年向けプリントを使用する。）

【実施方法】
・各回、最低２名のサポートスタッフおよび最低１名のサポートネット担当者を配置する。
・サポートスタッフは、地域協力者、教員志望学生、学園学習ボランティアの有志（七小のみ）とし、サポートネットから依頼する。
・関わるスタッフには①守秘義務が発生すること、②児童の主体性を尊重し、簡単なポイント指導にとどめること、③気づいたことは小さなことでもサポートネット担当者に報告し、担当者は必要な場合学年の先生方にも報告・相談すること　等あらかじめルールを説明する。
【実施手順】
・２学期中に、保護者に向けてお手紙配布（１２／１４付）
←参加承諾書をつける。一回でも参加意思がある場合は提出してもらう。
・途中からでも始められるようなシステム
←初回はレディネステストのようなプリント。クリアできたら発展問題。ただし、教科書内容の範囲内とする。間違えたらできるまで。課題がある子は苦手分野を徹底的に、または学年のさかのぼり。小学校算数の学習範囲にとどめ、中学校数学範囲は実施しない。
・先生や保護者へのフィードバックができるようなシステム
←個人ファイルを作成し、そこにプリントをためていく。必要な場合は、個人個人の課題を先生方にみていただきながら洗い出し、効果的に学習できるようにする。また、児童の保護者から求められた場合は、ファイルを開示する。
【実証・検証】
・終了後、子どもたち向け・保護者向けにアンケートを実施し、教えるプロではない人が見守る形での子どもたちの補習学習をサポートすることへの抵抗感や、学習の効果、また課題点などを聞き取り、今後の可能性について検証する。

また、教材の選定については第七小学校副校長と教務主幹に時間をとっていただき相談にのっていただきました。先生方とは普段からコミュニティ・スクール委員会の活動や地域子どもクラブ、学習ボランティアなどで意思疎通が図られているため快く時間をとっていただけました。先生方も非常に興味をもって関わってくださいました。

さらに、マルつけなどのサポートスタッフの募集に関しては、第三小学校校長が出身大学の後輩に声をかけてくださり、また地域の方の協力で教員志望で教育実習経験のある学生を集めることができました。

学校の教室を借りて実施することもあり、校長には事前、事中、事後など報告をこまめに行いました。

児童にも、参加するにあたってルールを決めました。（下の文参照）

＊＊ごあいさつ＊＊

「数学なんてこわくない！小学校算数の総ざらいパワーアップ」

にご参加いただきありがとうございます。この取り組みは、文部科学省の委託事業として、参加費無料で行っています。三鷹中央学園の小学校６年生のみなさんが、自信と希望と勇気をもって中学校へ進学してほしい、という願いから算数の総復習をサポートするのが目的です。そこで、主催のサポートネットから参加者のみなさんにお願いが2つあります。

お願いの1つは、

『まわりの人と比べない』ということです。

パワーアップが進んでいくと、だんだん一人一人進度（進み具合）に違いがでてきます。すぐにクリアできる子もいれば、そうでない子もいるからです。でも、このパワーアップはできる早さを競うものではありません。小学校で勉強した内容を確実に自分のものにするための時間です。

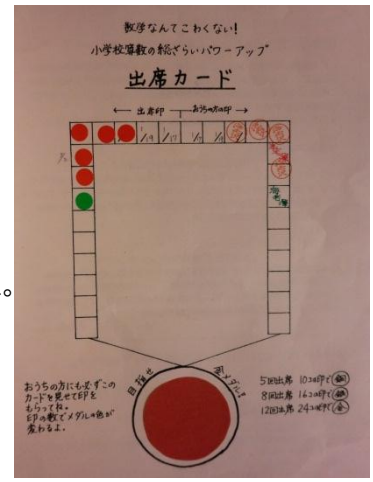
もう1つのお願いは、

『自信をもって中学校へ！』ということです。

中学になると「算数」が「数学」と教科名も変わり、内容も難しくなっていきます。でも、小学校での算数をしっかり自分のものにしていれば恐れることはありません。このパワーアップで小学校算数をしっかり自分のものにしてください。私たちサポートネットも、みなさんのがんばりを全力で応援します。

みたかスクール・コミュニティ・サポートネット

子どもたちの参加意欲を喚起させるために、出席カードも工夫しました。出席したらシールを貼る、右側に保護者印をもらう、回数によってメダルの色が赤（銅）から銀、金になっていきます。こんな小さな工夫が、意外と子どもたちの意欲をかきたてていました。



ある日の風景（@七小）

この日の参加児童は１７名。学生スタッフ４名。マルつけスタッフ２名。事務局２名。児童４人に対して学生１人。一人一人じっくりと見てあげることができます。

児童の学力はまちまち。プリントをどんどん進められる子がいる一方で、分数の足し算や掛け算九九が定着していない子もいます。そういった子どもたちには、学年をさかのぼってその子にあった内容のプリントをやらせます。子どもたちは自分のペースで苦手なところ、できないところをもう一度勉強し直すことができます。子どもたちの意欲を大切にするために「×はつけない」という指導もお願いしています。

回数を重ねていくと、子どもたちの学習態度に明らかな変化が見られるようになってきました。特に注意をしたことはありませんが、子どもたちが無駄なおしゃべりをしなくなってきたのです。自分から意欲的に算数に向き合おうとする子が現れ始めたのです。学校の授業とは違う、丁寧で自分のペースを大切にしてくれる時間。ちょっと甘えることもできる場所。子どもたちはそんなふうに受け取ってくれていたようです。

学生スタッフも、次に与えるプリントをどうしようか、とかあの子はここが苦手だからこういう指導を、とか連携を取りながら進めてくれています。教育実習を経験している教員志望学生の実力は、予想以上に素晴らしいものでした。

終了後は毎回３０分程度全員でミーティングをします。一人一人の気になったところや課題などを共有し、次回の指導につなげます。また、２，３回目からは運営方法についても学生の意見を尊重し、学生が運営の中心的役割、事務局スタッフはプリントを用意したりなどの事務的なサポートをする、という流れになっていきました。この春から中学校の数学教師として教壇に立つ予定の学生は、中学校入学直前の小学生の学習の状態を知ることができてとても勉強になった、と言っていました。

担任の先生からもうれしい声をいただきました。このパワーアップで意欲的に取り組んでいたＩ君。実は算数が苦手でいつも計算問題や文章題を簡単にあきらめていましたが、授業態度に変化があり、難しくてもあきらめなくなった、とのこと。短期間でしたので数値的な変化までは調査に至りませんでしたが、子どもたちの学ぼうとする姿勢の変化は、私たちにとって最大の喜びです。

★★メンバーの意識の変化～～いよいよ期（１月～２月）

これまでプランの練り上げや下準備など内部での地道な活動が多く、外に向けては特段発信していませんでしたが、いよいよ事業をスタートさせる時期になり、ホームページやお手紙などで保護者や地域に周知したりするようになってくると、がぜんメンバーの意識が変わり始めました。これまでの指示待ちが、積極的な動きになり、私たち役員は全体のコントロールさえしていればみんなが動くようになってきました。

成果と課題

１． 防災教育について（別刷り冊子「『防災・減災』で地域をつなぐ」参照）

●「３．１１地域防災を考える日 in みたかちゅうおう」は、当日スタッフやお手伝いも含めると約 400 名の来場者がありました。近隣にお住いの方の来場が多く、大変うれしく思うと同時に、防災についての意識の高さを感じました。内容についても、例年行われている住民協議会主催の三鷹市総合防災訓練とは違った形での防災イベントだったことに高評価をいただいています。

お手伝いには学校、コミュニティ・スクール委員会、PTA、おやじの会、地域子どもクラブ、地域団体など、三鷹中央学園関係の中核を担う人たちが集い、あの場を共有できたことは大きな成果です。小中学生のボランティアスタッフも参加してくれて盛り上げてくれました。

また、イベントにも来場し、終了後の交流会にも、他の学区の私たちと同世代のコミュニティ・スクール委員が多数参加してくれて、おやじの会が交流するなど新たなつながりの場となったことについては大変意義深いことだと思います。これからのつながりの可能性を予感させるものとなりました。

課題としては、学園の児童生徒、保護者の参加が少なかったことが挙げられます。いいイベントだっただけにそれを惜しむ意見を多くいただいています。今後理由を分析し次につなげていきたいと思いますが、今回は自発的な参加にとどめたことがその一因だとしたら、今後は緩やかな強制力をもたせるためにも学校の防災教育授業の一環となるような働きかけやプログラムの開発が課題です。

●「もしものときのハンドブック in みたかちゅうおう」も、一から学んだ私たちの気づきを形にして発表でき、完成度などについても高い評価をいただいています。「母親目線の現場力」に着眼し、手作りで作ったことに意義があったと思います。これを継続して更新していく方法、このハンドブックを発展的に活用していくことなどが課題として挙げられます。

２． キャリア教育について

●「授業づくりのお手伝いセカンドティーチャー‘ｓガイド」はまだ２割ほどしか進捗しておらず、まずはファイル版と WEB 版を作成、先生方にお届けすることが課題です。

外部人材の学校教育への活用については、学校側からのニーズだけではなく、企業の

側にもCSRの一環として高いニーズがあります。２月25日（土）に三鷹市市民協働センターで行われた市民シンポジウム「うちの会社も市民です」に市民パネリストとして参加、企業や地域住民が学校教育に関わる必要性や可能性について話をしたところ、多くの参加者が興味を示してくれました。大企業だけでなく、三鷹の事業主にも積極的に働きかけていくことも今後の課題です。

３．学習支援について

●「数学なんてこわくない！小学校算数の総ざらいパワーアップ」は、子どもたちにとっても、教員志望学生にとっても大変に有益で意義のある大きな成果を示したと思います。今回学生にレポートを依頼したところ、いい意見を出してくれているのでここに掲載します。

大学４年Ｄ・Ｈさん

①　小学校の算数定着を目的とした学習支援として有益かどうか

学習支援として、有益だと感じました。６年生の３学期に実施していることもあり、子どもたちも卒業を意識して、算数の振り返りに取り組んでいるようでした。加えて、大人一人に対して子どもが数人という手厚い環境であったため、児童たちも質問しやすかったと感じました。それらから学習支援として有益であると感じます。

②　学校と連携して行える事業かどうか

学校と連携して行える事業であると感じます。学校の教室を借りての実施であり、６年生の教室の隣であったことからも、子どもが参加しやすいような環境整備を連携しているようでした。学習支援活動において、学習に集中していない児童の日常での様子を先生から聞くこともでき、学校生活での児童の様子もわかり指導しやすかった。

③　教員志望学生のインターンシップの場として有益かどうか

有益だと感じます。小学校の卒業段階で、どの単元が苦手であるのかを知ることができますし、問題の解説の適切な方法を学ぶこともできます。複数のスタッフで指導にあたっている場合は、指導方法の違いからも知ることもできました。また、単発でなく継続して参加できたため、前回での反省を次回に生かすことがき、反省的な取り組みもできました。

しかし、初回での実施であったため、指導方法を運営者の人たちと考えていたから生じた効果かもしれません。回数を重ねて、ノウハウが溜まった中での学習指導であると、マニュアルに沿った指導をすることとなり、今回と同様の経験や学びが得られないかもしれません。

④　これらを含めて継続的な事業にするための課題と解決策などについて

継続的な事業にするための課題として２つを取り上げます。

一つ目が学習補助に関しては、学生スタッフの確保があります。継続的に参加できることが必要ですし、教育実習を終えているなど一定の教育活動への経験がある学生が数名いることが大切だと思います。

学生への謝礼についてはなくても問題ないと思います。将来に生かせることがわかれば参加する人はいますし、他では謝礼金なくボランティアをする場合もありますから。

二つ目が運営に関しては、地域スタッフの確保だと思います。今回も出欠の連絡や開始時間を早めること、学級閉鎖による中止などの連絡をしていただき学生スタッフとしてもうまく参加することができました。また、反省会での要望や質問などに素早く対応していただき、次の回には個々にあった教材を提供することができました。そのことにより、一回一回がバラバラな学習ではなく、一貫した学習支援ができたと思います。

今回の熱意のあった地域スタッフの方々と反対に、地域スタッフの活動が事務的な手続きのみだったり、学生任せだったりしていたら、うまくいかなかったと思います。

よい経験をさせていただきありがとうございました。

地域住民として、コミュニティ・スクールに貢献できたのかなって思いました。

大学３年Ｙ・Ｔさん

今回､｢数学なんてこわくない！小学校算数の総ざらいパワーアップ｣の指導員として参加させていただき、本講座は小学校の算数定着を目的とした学習支援として有益であると感じた。通常の授業と違い、各々のペースで学習を進めることが出来ることや、苦手分野を本人が再認識することができ弱点を克服するのに適した講座である。また、放課後に行う学習ということもあり、自宅での学習の習慣化にも効果があるように思う。

学校と連携して行える事業かどうかについては、指導員を一定数確保できれば問題なく行える事業であると思う。教員志望学生のインターンシップの場として有益であると今回指導員を経験して感じたので、大学側と連携を取り指導員を確保できる状況にすることで、児童一人あたりに就くことのできる指導員が増える。そうすれば更に有意義な講座になる。教員志望の学生にとっては、児童に指導する良い機会になるのと教育実習以外の学校を見ることができるのは良い経験になる。大学を出てすぐに教師になることに不安を感じている学生は多いと思う。そういった学生の経験の場にもなり、児童の中学校へ進む際の学力の不安も克服することができる。指導員側、児童側の両方から考えても本講座は継続して行っていただきたいと思う。

今後の本講座の課題としては、学級担任の先生にあらかじめ児童の得意分野、苦手分野、集中力の有無、個別指導を好む、嫌う、などの特徴を指導員に簡単でいいので伝えていただければ指導員も多少は児童との接し方も変わる部分もあると感じた。今回はサポートネットの方々と指導員のコミュニケーションもしっかり取れていた。こういった関係が保てれば今後の学習支援教室も上手くすすむと思う。

大学４年Ｋ・Ｋさん

① 小学校の算数定着を目的とした学習支援として有益かどうか

非常に有益だと思います。その理由として一番大きいと考えるのは「一人一人に合ったきめ細かいサポート」が実現できるからです。この講座には学力のそれぞれバラバラな子ども達が集まります。

すると、当然ですがつまずきポイントや課題は子ども達によって異なります。学校の一斉授業では追いついていない子どもを気にしながらも先に進まざるをえません。また、子ども達も「自分はまだここがわからないんだよなぁ」と思いながらも友達の手前なかなか「わからない」と言いにくいと思います。しかし、この講座であれば「自分のペースで」ということが前提として保障されていますので子ども達は安心して分からないものを徹底的に取り組む姿勢が持てます。また、サポート学生やスタッフの方々がその子どもにあったプリントを用意して下さるので、「この苦手分野を克服する為には何をやったらよいのか」という具体的な課題解決支援が行われていることが子ども達にとって大変素晴らしいことだと思います。

また、子ども達の中には「落ち着いた学習姿勢の確立」など一見、算数とは深く関係のない課題を抱えている子どももいました。しかし、それも「最初の 10 分はプリントの時間」など、個別に対策を施していくことで、算数の力はもちろん、学習姿勢もしっかりと身につける基礎が積み重なったと思います。

② 学校と連携して行える事業かどうか

その形が一番理想ではあると思いますが、実現の為には様々な手立てを要すると思います。というのも、第三小学校の先生でこの講座の存在を知っている方が少ないという現実があったからです。私はまだ教員の世界に入りきっていないので分からないのですが、「学校と地域の連携」とうたいながらもその分野が「学習支援」と言う風になると、色々な風が吹く場合もあるのかなと感じました。　もし、実現するのであれば活動報告書を担任の先生に渡すことや、定期的な話し合いが必要だと思いますが、それが実際に行えるのかどうかは難しい部分もあるのではないでしょうか。学校には教室を貸してもらう、教材置き場を確保してもらう、コピー機を貸してもらうというような物資面での連携が一番早く出来ることだと思います。　また、確かに学校の先生と連携した方がよりきめ細かいサポートが出来るようにも思いますが逆に、「学校」というくくりから離れて行うと割り切っても問題ないと思います。今回の活動を通して思いましたが、この講座には学力が非常に乏しい子どもが参加する傾向があります。そういった子ども達は「学校という場の中での自分」に自信を失っている可能性もなくはないと思います。ですから、「地域の力」という立場を前面に出して、「地域の方達でサポートするからね」というメッセージを出した方が素直に安心して学習に取り組める可能性もあるのではないかなと思うからです。今回の経験を通して再確認しましたが、教師が子どもに対して期待・願うことと、保護者の方が子どもに対して期待・願うことというものの質が異なるように思えました。うまく言えないのですが、保護者の方の方が教師が持っている「教育的な～」というフィルターを通して子どもを見ていない分、その思いが子どもに届きやすい・・・というのでしょうか。うまく言えないのですが、「地域の方の力」というのは非常に大きな力になると思うのです。

③ 教員志望学生のインターンシップの場として有益かどうか

インターンシップを私がやったことが無いので、イメージが付かずうまくお答えできません。ですが、教員志望の学生にとっては非常に良い勉強の機会であることは間違いないと思います。

④ これらを含めて継続的な事業にする為の課題と解決策について

学校との連携方法については分からない為お答えできないので、学習サポートに関する

ことで述べさせていただきます。この講座で間違いなく「苦手分野と対決する！！」という機会と克服する為の教材は確保されていると思います。私が一番思うのは今回はあくまで算数ですがこの時間を通して

「基本的な学習姿勢の確立」と算数に対して自信が無い子どもにほど「自分だってやればできるんだ！算数が出来るようになったから他の教科だって絶対に出来るはずだ！」という自信を持たせてあげることが出来るような時間になればいいと思います。その為には、学習支援のサポート学生は多ければ多いほどいた方が良いと思いますし、サポート学生からみた子ども達の様子を記した記録、講座終了後の話し合いというものを今後も続けていくことが出来れば、継続的な事業として大いに成り立つと思います。「算数」→「数学」という変化は子ども達にとって少なからず不安や負担を抱かせると思います。しかし、この講座で子ども達のそんな思いが少しでも拭える機会になるであろうということが実感できました。必ず子ども達に役立つと思いますので、是非今後とも続けて頂きたいと思っています。

大学４年Ｙ・Ｔさん

小学校六年間で学習してきた様々な単元の振り返りとしては非常に大きな成果が期待できると感じた。おそらく当時はできていた内容であるが、単純に「公式」「計算のきまり」といった解き方を忘れてしまっている児童が多く見られる。こうした児童はその解き方を思い出し、演習を重ねることで小学校の総ざらいがうまく達成されたと感じた。

また、学校教育における一斉指導ではどうしても生じてしまう学力差に対して、時間をとって個別的な指導を行ってゆける点については非常に有意義なものである。理解の不十分な単元を最も基本的な部分から反復していくことで少しずつでも理解を積み上げることで、算数を苦手とする児童に自信つけさせていくことも可能であろう。

学校という場であるが、いつもとは異なる形で学習に向き合えるこうした時間は算数という教科を超えて、児童にとってとても新鮮であり、前向きに学習していく大変良い機会であると感じた。

学校現場との連携という面では、参加児童の学力傾向、苦手分野といったものは日ごろ関わってきている教職員の方々がよくご理解されていると思うので、事前に少しでも情報を共有できていると、より効果的な指導を簡単に行っていくことができるのではないか。

また、六年生ということでその後の振り返りが難しい時期ではあるが、活動期間後の様子、変化等、少しでも学校現場側からの評価をいただくことができれば、よりよい活動へのフィードバックが可能となるのではないか。

算数という教科に関しては教える内容ははっきりしている反面、教え方が大変重要であると感じた。算数が苦手な児童に対しては、自分も中途半端な理解では分かりやすく指導することが非常に難しい。児童の理解に合わせて、いかに噛み砕いて説明していくかという状況は、このように実際に児童と向き合う機会を学生のうちから得られることは非常に貴重な経験になると感じた。一斉授業と違い、一対一という場面が大半であるが、このような直接的な体験は児童理解、教科理解どちらの面から見ても大変貴重な体験であったと感じた。一般の教職員とは違う学生だからこそできる関わり方もあるであろうし、学生としても一斉授業が求められる学校現場・教育実習の前段階として、関わりやすい活動であると思う。

学力差にどのように対応していくかが一番の課題であると感じた。早い段階でそれぞれの児童の苦手分野を把握しレベルにあった演習をつませることが重要であり、大変な部分である。こうした点は学校との連携を深め、児童の情報共有を行うことで、教材準備もしやすくなるであろう。また、活動の効果をどのように評価していくのか、学校との連携も踏まえ検討していくことも重要であると感じた。

また、苦手単元に重きをおきすぎ、意欲が損なわれてしまうこと、その他の分野の演習がおろそかになってしまうこと等、バランスのとり方が非常に難しいと感じた。中学校数学に向けた小学校の総ざらいということで、算数が苦手な子をメインの対象と定めると、その学習意欲をいかに高めるかも非常に大きな問題である。

今回の活動を通して、問題にあがった、掛け算九九・分数の計算・図形の公式といった単元については、（スタッフさんのご負担は一層大きくなってしまうと思いますが…）学習する学年の段階で短期間でよいので、放課後にこうした活動を行いしっかりと定着させることで、その後の学力差を埋めていくことが可能なのではないかと感じた。

約一ヶ月半という期間でしたが、このような活動に参加させていただき自分自身、大変貴重な経験をさせていただきました。サポートネットスタッフの方々には大変感謝しております。

微力ではありましたが、少しでも児童の苦手克服につながる活動ができたならば幸いです。

大学３年Ｍ・Ｉさん

私は今回一度だけの参加でしたが、この取組みに参加させていただいて、やはり児童の中での理解度の差といったものを感じました。小学６年生を対象とした、中学校に進学してもついていけるよう、６年間の総復習といったねらいでの取り組みでしたが、小学１年生から６年生までの算数の中で児童がつまずく単元といったものはそれぞれであり、つまずきはその場で対処するのが理想だと感じます。この事業の場で児童は個人の課題を自分のペースで進める事ができ、先生の人数も多く、普段の授業とは違った安心感の中で学習することができたのではないでしょうか。今回は６年生のための取り組みであったようですが、今後もし継続していかれるのであれば、４年生や５年生といった学年での実施もご検討いただき、つまずきの早めの対処を是非希望致します。

また、学校と連携して行える事業かどうか、教員志望学生のインターンシップの場として有益かどうか、といった点では、児童一人一人に合った課題を与えるために学年担任の先生方との情報交換や、参加できるのに参加しない児童を呼び込むための学校の協力を求めるなども必要かと感じました。インターンシップの場としてはとても有益であり、学生が集まる事で学生同士の意見交換、情報交換の場ができたり、児童との関わり方、教え方なども同年代だからこそ客観的に見て学ぶ事ができます。そういった点で、学生にとって、とても良い刺激を受ける場であると感じました。

今回は、スタッフのきめ細やかな対応と学生の熱意がその成果の原動力となっているのは、学生のレポートを読んでも明らかです。学生の指摘するとおり、マニュアルを作成しシステム化していくことがマイナス要因にならないようにしていくことが大切です。

また、今回は文科省の委託金から「有償」にできたことで学生に声をかけることができました。教員を志望している学生とはいえ、まったくの無償ボランティアは考えにくいです。今回交通費という感覚で１回につき 1,000 円の謝礼を拠出できたことはとても大きいです。今後も有償で学生に集まってもらえる仕組みをどうやって構築していくのかが大きな課題です。

今後の展望

●防災教育について

地域のつながりについては、達成ゴールは無いと思っています。広がりも深まりも無限です。この活動を継続させ、地域をもっと強い絆でつなぐことが大切です。

また、子どもたちへの働きかけについては、自発的な参加も呼びかけながら、やはり授業として扱ってもらうことが一番です。次世代の担い手を育成するためにも、学校と連携して三鷹中央学園版防災学校教育プログラムを開発していくことが今後の目指す方向性です。

そのためには、行政機関との連携、防災についての学識者との連携等を図っていきたいと思います。このプログラムが開発できれば、その地域の特性にあったバージョンに変えればどこでも使うことが可能です。

●キャリア教育について

大企業や教育系ＮＰＯなどが連携した、完成されたキャリア教育プログラムはたくさんあります。しかし、地元の企業や商店など地域に根差した方々にご協力いただき、三鷹版キャリア教育プログラムを作ることができれば、企業側はＣＳＲとして、学校側は充実した教育の提供として双方に利点があります。今後もコーディネーター集団として研鑽を積み、多くの地元企業、地域人材を学校教育につなげていきたいと思います。

●学習支援について

第七小学校ではすでに教員がこの取り組みの成果に着眼し、来年度連携協力して児童の学力定着を目的とした補習学習が計画されています。学校として取り組むには限界もあり、私たちの力を必要としています。このように協力体制があり、教材やボランティア謝礼などの財政的な基盤があり、関わる人の熱意があれば取り組みを広めていくことが可能です。

●サポートネットの存在意義について

今回の委託事業を実践するのに、15 名のスタッフの総労働時間は 3338，25 時間、人件費総計は 2,937,660 円でした。これは一人あたりの労働時間にすると 44，51 時間／月、1 か月あたりにかかる一人あたりの人件費は平均 39168，8 円となります。

ほとんどのメンバーが PTA や地域団体などで役を兼任したりしており、他の活動をしながらこちらに関わっていましたので、メンバーの感想としては「とても忙しかった」感覚でした。契約期間が 5 か月と短かったため、業務が凝縮しており多忙感があったかと思います。1 年間にならすと 1 か月あたりの一人分の人件費はおさえることができると思います。

私たちのような普通のお母さんはどこにでもいます。その人たちが「子どもたちのために」という熱意と、財政的な支援と、組織としてまとめるリーダーがいれば他の地域にも広められる活動である、とメンバーの多くは感じています。

私たちは決してお金のために活動したわけではありません。が、これまで長きにわたって無償のボランティアを続けてきた私たちが、活動したことに対価が発生することでより責任感を感じ、完成度の高いものを作り上げようとする意欲と、やはり報酬をいただけることの達成感は動機づけの大きな要因になります。その達成感はさらなる高みを目指して学習する、研鑽を積むことにもつながっていきます。そうなるとサポートネット自体が収入を得る場でもあり、生涯学習の場でもある、ということになります。

また、地域の方々からも、「つなぐ人」の重要性が言われています。今後私たち自身がコーディネーター集団として研鑽を積み、地域をつなげると同時に、自分たち自身が学び、多くの気づきを得てまた次の世代のお母さんたちへ受け継いでいき、地域の結びつきを強固なものに、持続可能なものにしていくことが、私たちに課せられた使命だと感じています。

また、今後は行政との連携を強め、三鷹中央学園だけでなく三鷹じゅうに広めるための活動、また三鷹から全国に向けて発信するような活動に展開できればと思っています。三鷹のコミュニティ・スクールと、そこから発信して地域のつながりを作るスクール・コミュニティを実践する私たちが両輪となっていけるよう、多くの方の支援をいただきながらフロントランナーとして模索を続けていきたいと思います。

一部の方からは、持続可能にするためには法人化を視野に入れるべきとご意見をいただいています。現在は任意団体としていますが、今後の在り方としてどういった形がいいのか、平成 24 年度は、23 年度にやり残したことやさらなる課題解決に取り組み、地域や学校のニーズに応えながら情勢を見極め、25 年度には方向性を出せるように検討していきたいと思います。

今回の委託事業にあたっては、何も知識のない素人集団が一つ一つ指導を受けながら取り組んでまいりました。素人集団でも、子どもを思う気持ちと、理解ある周囲の環境があればここまでやれる、ということを実感しています。そして本当に多くの方が応援、協力してくださいました。心から感謝申し上げ、報告とさせていただきます。

協力者一覧

今回の委託事業にあたっては、たくさんの方にご協力をいただきました。（敬称略、順不同）

お名前	所　属／役　職	
貝ノ瀬　　滋	三鷹市教育長	助言
松永　　透	三鷹市教育委員会指導課小中一貫教育施策担当課長	助言
白井　　千晴	三鷹中央学園長/三鷹市立第三小学校長	助言、協力
田邉　　佳伸	三鷹市立第七小学校長	助言、協力
勝野　　能光	三鷹市立第四中学校長	助言、協力
大倉　　誠	三鷹市防災課	助言、協力
篠原　　秀和	第五小学校避難所運営連絡会	防災講話講師、助言
三鷹市管工事業協同組合		防災イベント協力 （災害時給水所設置訓練）
吉野　　恵蔵	高山小学校 PTA 会長	ハンドベル演奏
K～ベルマモン		ハンドベル演奏
竹上　　恭子	みんなのブックカフェ	エコキャンドル指導
浜崎　　一子		キャリア教育データ入力、助言
京増　　恵太郎		損害保険契約
共和商事(株)		防災イベント協力
日の丸防災		防災イベント協力
三校ＰＴＡ	（三小・七小・四中）	防災イベント共催、協力
おやじの会	（三小・七小）	防災イベント協力
地域有志	（三地区・七地区、青少対・交通対）	防災イベント協力
白井　　健志	横浜商科大学卒	学習支援協力
黒田　　楓	玉川大学４年（※）	学習支援協力
萩原　　大輔	東京学芸大学４年(※)	学習支援協力
豊田　　佳史	東京学芸大学４年(※)	学習支援協力
峰島　　侑也	東京大学３年(※)	学習支援協力
山本　　貴大	東京学芸大学４年(※)	学習支援協力
田村　　泰人	駒沢大学４年（※）	学習支援協力
西野　　彩	東京学芸大学４年（※）	学習支援協力
森下　　研吾	和光大学卒	学習支援協力
井澤　　元花	国士舘大学３年（※）	学習支援協力

（※）学年は２月当時　　ほか多数